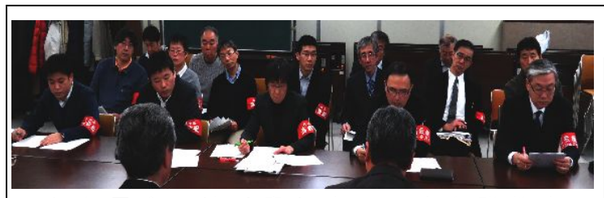
はばたき

道高教組札幌支部
（札幌市中央区大通西12丁目
北海道高等学校教職員センター
3階）
TEL　011−271−5875
FAX　011−271−5895

定員教育予算最終交渉報告

「割り振り変更業務」さらなる拡大へ 「週休日の半日勤務の振替」改善も

1月27日（金）、道高教組・道教組は、賃金および定員・教育予算に関わる対道教委最終交渉を行いました。交渉には、全道からの動員団が参加するなか、とりわけ超勤解消を求める学校現場の思いを突きつけながら交渉をしました。以下、主な内容を報告します。



私たち道高教組・道教組は、教職員の生活と権利・教育条件改善のために「賃金・教育予算に関わる要求書」に基づく道教委交渉を行っていますが、今回がその最終交渉となりました。

最終交渉の主な項目は、①時間外に行われている業務の「割り振り対象業務の拡大」すること、②土日などの週休日に半日勤務を2回行った場合、1日振替を可能とすること、③部活動指導に関わっての超勤解消にむけ、道教委が主体的にとりくむこと、④過労死ラインを越えるような長時間過密労働解消のために実効ある努力を行うことの4項目でした。

「家庭訪問」「教育相談」も「割り振り業務対象」に

私たちは、時間外勤務に行う全ての業務について「割り振り」が可能となるようこれまで毎年粘り強く交渉してきました。その結果、徐々にではあるもの対象業務が拡大してきました。今回の交渉においても私たちは、「時間外に行われているすべての業務を割り振りの対象にする」ことを求めて交渉に臨みました。

交渉結果は、これまで対象業務となっていた①「修学旅行の引率」②文化祭 ③体育祭①文化祭、体育祭の事前準備（1週間前）⑤登校時の通学指導 ⑥校区内巡視⑦特別支援学校の現場実習の引率に加えて、『家庭訪問業務』『教育相談業務』を新たに対象業務に加えるとともに、『文化祭または体育祭の事前準備業務の期間を現行の1週間から2週間に延長する』こととし、平成29年度当初から実施」すると道教委は回答しました。

他県では、「成績処理」などの教務業務の他「面接指導」「PTA業務」なども対象業務としていることから見ると非常に不十分な回答ですが、多くの教職員の思いを一歩また前進させることができました。

週休日の半日勤務2回を1日振替可能に

学校職員の業務の特殊性から、土曜授業等の週休日に勤務することがあり、学校現場からは「半日勤務2回でなぜ1日の振替休業にできないのか」の強い要求がありました。1日8時間勤務時代にできたことが15分短縮になったことでできなくなるなどとんでもない措置がまかり通ってきた問題でした。

これまでの交渉を踏まえ粘り強く折衝も重ねた最終交渉。私たちの要求が実現することになりました。

道教委は、「教職員の勤務の特殊性を踏まえ振り替え単位を新たに3時間45分を加え4時間勤務とあわせて1日の振替とすることができるよう」「平成29年度当初から新たに3時間45分の振替が可能となるよう条例提案を知事に求める」と回答しました。

部活動申しあわせ事項を文化系にも

私たちが今年度とりくんだ「職場実態・要求アンケート」では、高校では53％の教職員が「部活動が負担」と回答し、「大きな苦痛になっている」との声が多数寄せられていました。

交渉において、現場の教職員が負担軽減を感じられるとりくみを求めたことに対して道教委は「文化系部活動も含めて申し合わせを周知徹底する。実効あるとりくみがすすむよう努める」との回答をしました。

異常となっている「超勤実態」を解消することも最後に強く求めましたが、「縮減に向けた更なるとりくみを強力に進める必要がある」と回答するにとどまりました。

引きつづき「超勤解消」に向けたとりくみを学校職場から声をあげていきましょう。

【部活動申しあわせ事項】
①週1回は休養日を設けること
②授業日は放課後 2〜3 時間程度で活動が終わるようにすること
③休日は半日程度でも効果的な活動ができるようにすること
④特定の教員に負担がかからないよう、複数顧問の配置を検討すること
※申しあわせ団体（5 者）
（校長会・中高体連・PTA・教育委員会・体育協会）

【文化系も新たに対象に】

上記の「申しあわせ」を吹奏楽部などの文化にも広げ、申しあわせ団体に「高文連」が加わる。※石狩管内中文連はオブザーバー参加

札幌支部第73回定期大会 2月18日開催

なぜ学校現場に「やらされ感」が広がるのか？ 討論しましょう

2月18日（日）、私たち道高教組札幌支部は、1年に一度の支部定期大会を開催します。大会では、いまあらためて「教職員組合は何をなすべきか？」を問いかけ、そのことを深く議論したいと考えています。なぜなら、私たちには、学校や教育に対する統制や圧力がますます強まっているという強い危機感があるからです。

教育は本来、未来を担う子ども・若者と関わるきわめて創造的でやりがいのある仕事のはずです。しかし今、教育から創造性が奪われ、「やらされる仕事」に貶められようとしています。これこそが私たちの「危機感」の本質であり、多くの教職員のみなさんと思いを同じくできるのでないでしょうか。

こうした危機感は道教委の幹部ももっているようです。札幌市内のある高校で校長が職員に配布した「校長通信」で、「校長会で道教委から指導、叱咤激励を受けた」として、大要、次のような講話の内容が紹介されています。

校長先生方から「受け身の姿勢」を強く感じる。それが「やらされ感」「押しつけられ感」を助長し、「徒労感」を増す。そうならないためには自ら積極的に国の動向を読み取り、主体的に考えることだ。今の教育改革の背景には、日本の国際競争力の低下、人材育成への危機感がある。校長先生方は「待ちの姿勢」では「やらされ感」が高まる。教育改革の流れを先取りし、先手を打つ姿勢をもってほしい。

何という傲慢な姿勢でしょうか。何という反知性的な姿勢でしょうか。少なくとも学校現場に広がる「やらされ感」「押しつけられ感」「徒労感」の原因を真剣に考えようとするならば、政府や道教委が押しつけてきた政策について吟味してみることが、誠実で主体的であり、知性的な姿勢のはずです。しかし、それらをかなぐり捨てて、政策自体をまったく無批判に受け入れさせて、それに「やらされ感」を感じるのは「主体性がないからだ」と断じていることに、いま進められようとしている「教育改革」の正体が見え隠れしていると言えるのではないでしょうか。

私たち高教組も学校現場に広がる「やらされ感」「徒労感」に教育の危機を感じています。そして、その原因がどこにあるのか？どうすれば打開できるのか？大会での議論を通じて明らかにしたいと思っています。

（支部書記長　尾張　聡）

「未来を切り拓くプロジェクト『ゆいまーる』」報告

沖縄に1000名の青年教職員が集う

ゆいまーるに参加して

奥野　愛（札幌養護学校）

辺野古基地や高江のヘリパット建設のニュースを新聞で見るたびに、「今の沖縄を一度自分の目で見ておかなければ」とずっと思っていました。

大雪で欠航が相次ぐ中、私は1時間遅れのフライトで沖縄まで行くことができました。

初日は、「沖縄から憲法を考える」と題した画監督の三上智恵さんの講演でした。沖縄で米兵による女性への暴行事件への抗議集会のなかで語られた「私たちは、子どもを守る『風かたか（壁）』になれなかった。」という言葉は、涙なくしてきけませんでした。「風かたか」とは、風が強い沖縄でどうやって風を防ぐかという観点から発展してきた風よけのことです。私は、風かたかになって子どもを守る大人になっているのだろうかと、今、学校で一緒に生活している生徒や、去年卒業していった教え子のことを思わずにはいられませんでした。三上さんの講演は、沖縄の問題を当事者として考えているか、他者の苦しみを自分のことのように感じる「肝苦りさ（ちむぐりさ）」を私に残してくれました。

最終日の26日は、沖縄戦を体験された方の話を聴きました。「沖縄戦は人の数だけ実相がある。戦後の生活の然り」と語っていました。戦争で学ぶべき時に学べず、青春時代を奪われ、80歳になった今でも文字の読み書きができないお姉さんの悲しさ、くやしさを語っていました。戦争は、人が人としての感性を奪ってしまうこと、幸せに生きていきたいという願いさえも踏みにじってしまうものだと改めて思いました。

今を生きる大人の一人として、沖縄を知った者として、自分がどう変わっていくか、周りの人に伝え、かかわっていくかを、考え続けています。

今回、ゆいまーるという機会を与えてくれた高教組に深く感謝します。

「闘争・平和カンパ」ありがとうございました！

昨年6月・12月期末手当の時期、札幌支部への「闘争・平和カンパ」に多くの教職員のみなさんのご協力いただきましたことに心よりお礼申しあげます。

「今月の給料、8万円も多かった。ありがとう」の声が職場で聞かれました。これは、前号「はばたき」でお知らせしたとおり、私たちと道教委の交渉の結果として、「3年連続の賃金・一時金アップ」したもので、今年度4月に遡って「差額支給」されたものです。私たちの賃金は、官民一体となった労働組合の闘いが、民間賃金を押し上げたこと、私たちの「人事院」「道人事委員会」への闘いによって最終的に道・道教委と妥結したものです。今後とも全教職員向けに情報発信している「はばたき」の発行のためや「賃金闘争」・教職員の生活権利を守る闘い、憲法・平和を守りいかすとりくみなどに活用させていただきます。今後ともよろしくお願いします。

第16回全国障害児学級・学校学習交流集会　600人が参加

学ぶことの喜び、学びのエネルギー　お腹いっぱいもらったよ

1月7日（土）～9日（月）、「第16回全国障害児学級&学校学習交流集会ｉｎ北海道」が盛会に開催されました。全国から教職員・保護者・学生・一般市民の方々六百名ほどが参加しました。

オープニングでは全道の先生方からのビデオメッセージが紹介されました。全道各地の風物が画面いっぱいに紹介され、ユーモア、苦労話、失敗談、期待の言葉やエールを交えてたくさんの先生がメッセージを伝えてくれました。全道各地に散らばる特別支援教育に関わる仲間、なかなか顔を合わせて語り合えない北海道の状況を少しでも伝え合いたいとの思いから作ったオープニングビデオです。好評でした。

3年前の「春の学習交流集会」で創った「Smile Smile Smile」を30人程の高教組、道教組の先生方で歌いました。そのあとは、「学校Ⅱ」のモデルの一人である山田隆司さんと教育大釧路の戸田竜也さんとの記念対談。「学校Ⅱ」を見たことがない方がいるかもしれませんので、予告編をご覧になりたい方はこちらからどうぞ。

https://youtu.be/8_Owo2plumM

山田さんからの「学校は、子どもたちにとって楽しく生き生きとしていられる空間でなければならない」との思いや、戸田さんからの「学校は、子どもたちが元気になっていけるところ。安全基地・心理的拠点になれるところ」との思い、そして「今の学校はどうなっていますか」の問いが、参加者の胸に突き刺さりました。

山田さんからは勇気と励ましをもらい、戸田さんからは正確なコンパスを示していただきました。

1日目夜は、三百人以上が参加する『全体交流会』。各地域からの熱い！熱い！メッセージに圧倒されました。会場ホテルのディナーは、北海道名物「カニ」も並べられ、ピラニアのような参加者にあっという間に食べつくされました。交流も熱量！！っていう感じでした。

最後に皆さんで肩を組んで歌った「あなたが夜明けを告げる子どもたち」は、参加者の連帯感を象徴していたように思います。

2日目8日（日）は午前「てんこ盛り講座」や「文化バザール」、午後は「基礎講座」と「旬の実践分科会」。「てんこ盛り講座」は、札幌支部長の桑原さんでした。ゆるーい感じでウクレレの初心を学びました。北の国から、知床旅情、襟裳岬など北海道にまつわる名曲をマスターして帰ってもらえたようです。また、新篠津高等養護学校の金谷さんが「曲づくり講座」を担当。すてきな曲ができたようです。全教常任委員の大先輩から「素晴らしい力量の先生だ。良い授業を作っているに違いない」といったお褒めの言葉をいただきました。

今回の学習交流集会は、北海道ならではの企画として「アイヌ文化講座」と「北海道冬レク講座」を行いました。それぞれ、楽しい、深い学びの場になりました。

午後は「旬の実践分科会」。「病弱障害分科会」では高校から特別支援学校に異動してからの様々な職場文化のギャップに驚き・悩み（？）ながらの実践をまとめた発表、大阪の若い方の職場での希望と現実の間での意識の変遷の記録（意志の強さのすごいこと！）、愛知で人形劇をやっている方の職場の雰囲気（威圧的な生徒指導から）の変え方（とにかく冷静でうまい！）と、年齢も状況も様々な発表で楽しみながら学びを深めることができました。

3日目、9日（月）は教育フォーラム、3つの会場で開催。どの会場もいっぱいで、立ち見も、例年以上の人の参加者数でした。

ここでは、来年2018年度から始まる高校における「通級指導」についての分科会について触れます。

高校での通級指導って何？初耳。という人はいませんか？これは他人事ではなく、私たちすべてがごく近い将来、いろんな考えがあるにしても考えとりくむ必要に迫られる内容です。文科省はどの学校にも通級指導を必要としている生徒はいるという認識で動き始めていて、北海道でも既に3校が試行しています。子どもをいわゆる受験学力以外のいろんな物差しで多面的に見て支援することが必要になり、価値観の大きな変革が求められそうです。今後は高校の先生方も特別支援教育の研修などに積極的に参加するなどして学習しましょう。

今回の学習会では、子どもたちだけではなく私たちも含めての学ぶことの喜び、学びのエネルギーを、全国から参加した皆さんからお腹いっぱいもらってきました。

高教組は教研などをはじめ様々な学びの場をご案内、提供しています。是非、皆さま積極的にご参加ください。（報告文支部　桑原・三田村）

つぶやき

高教研の全体講演を聞いて考えたことなど

札幌支部副支部長　野村健治（札幌東商業高校）

今年の高教研の全体講演講師は中島岳志氏（元北大、現東工大教授）であり、「自主規制はいかにして起きるのか」という演題での講演だった。

氏は冒頭、第二次安倍内閣以降、新聞やテレビなどのメディアのみならず教育現場にも「自主規制」がはびこっていること、その「自主規制」を克服するためには、まずは「自主規制」が起きるメカニズムを客観視する必要があること、そうすることを通して、この問題を皆さんとともに掘り下げ考えるための講演としたい、と講演の目的について触れた。

氏はまた、戦前の日本では、国民が「空気」を読むことによって、戦争に反対できない状況が生まれたこと、その「空気」こそが「自主規制」であり、それは為政者側から意図的に生み出された「権力」であると看破しつつも、その「権力」が生み出されるプロセスを俯瞰して私たちに示した。それは言うまでもなく氏の「現代日本」に対する相当な危機意識からの表出であった。

年末の校長会で、とある道教委幹部は校長達に対し、「自ら積極的に、国の動向を読み取り、主体的に考えること」や「待ちの姿勢、やらされ感ではなく、高校教育改革の流れを先取りし、先手を打つ姿勢」を求めたという。これは「自主規制」どころか忖度して「先取り」をするよう求めたメッセージであるが、年明け早々に高教研に参加した道教委の幹部や全道の管理職はこの中島講演をどのように受け止めたのであろうか？　ご自身の昇進や再就職先の確保などといった5年、せいぜい長くて10年という短く狭い視野しか持ち合わせていなければ、自身のことは全く切り離してこの講演を聞いたことだろう。

これはまさしく「思考停止」といえるだろうが、他人のことを笑ってばかりはいられない。「思考停止」はわれわれ人類が長い歴史の中で持ち合わせた共通の危機でもあるからだ。だからこそ、教員の端くれである私たちには、授業を「思考停止」の場からどこまで「考える」場にできるのかといった困難かつ重要な課題があるのだと思う。これは真実を見極めることが求められるポストトゥルース（脱・真実）の時代においてはなおさら大切なことだ。

最後に、先述した私たち人類の共通の課題を「はばたき」読者の皆さんと共有するために「個人と社会（オルテガ 1969）」から引用して私のつぶやきを閉じたい。

人間は思考能力を授けられたのではなく、実をいえば、訓練とか教養、あるいは教育を通じて、何千年にもわたる努力を傾けながら、少しずつ作り上げ精錬してきたのである。思考能力は最初から人間に与えられてきたものでないばかりか、現在という歴史的時点においてさえ、われわれが言葉の素朴かつ通常の意味において思考と名付けるところのもののわずか一部を、粗雑な形でしか形成することに成功していないのである。さらにこの獲得されたわずかな分量でさえも、獲得されたものであって本来的なものでないから、つねに消滅の危険にさらされており、過去において事実何回となくそのおかたを失ってきたのであり、われわれはいままたそれを失わんとしているのである。世にある他の存在者と異なり、人間はけっして完全な形で人間であるのではなく、むしろ人間であるということは、正確にいうなら、いまにも人間でなくなることを意味しているのであることをやめることである。虎は虎であることができないのに対して、人間は絶えず非人間化される危険のなかに生きているのである。

2・11　2つのつどいごあんない　ぜひ参加ください

第40回紀元節復活反対2・11道民集会

と　き：2月11日（土）10：00～12：00
ところ：ホテルライフォート札幌2階
（札幌市中央区南10西1）
参加費：無料
主　催：靖国神社国営化阻止道民連絡会議
（略称　靖国共闘会議）
講　演：「いま！日本国憲法の危機」
～基本的人権・平和主義があぶない～
講　師：清末愛紗さん（室工大准教授）

2月11日「建国記念の日」は、侵略戦争を美化する皇国史観を想起させる象徴的な日として位置付けられてきました。戦前の「紀元節」 にあたります。戦争・平和・憲法を一緒に考えませんか。

2・11子どもと教育を守る北海道集会

と　き：2月11日（土）13：30～14：30
ところ：ホテルライフォート札幌2階
（札幌市中央区南10西1）
参加費：無料
主　催：北教組・道高教組
講演：「作文教育がなぜ罪に」～獄中メモを追って～
講師：佐竹直子さん（北海道新聞社　記者）

佐竹さんは、「獄中メモは問う　作文教育が罪にされた時代」で2015年日本ジャーナリスト会議賞を受賞された方です。著書は、「北海道綴り方教育連盟事件」の事者が残した「獄中メモ」をきっかけに遺族・関係者の取材を重ね、思想弾圧の実像に迫ったルポで、三浦綾子「銃口」 がモチーフになっています。戦前の教員逮捕事件を現代に問うという内容で講演していただくことになっています。